

氏名 新井 麻弓
 ヨミガナ アライ マユミ
 学位の種類 博士（美術）
 学位記番号 博美第650号
 学位授与年月日 令和3年3月25日
 学位論文等題目 〈論文〉 「なる」の芸術実践ーオートエスノグラフィーと芸術論
 〈作品〉 Avatar tours #1: Zurich Altstetten [パフォーマティヴ・インスタレーション]
 Avatar tours #2: Tokyo Ueno [パフォーマティヴ・インスタレーション]
 Avatar tour #2: Tokyo Ueno [ツアー・パフォーマンス]
 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(美術研究科)	小山 穂太郎
(論文第1副査)	東京藝術大学	名誉教授	()	須永 剛司
(作品第1副査)	東京藝術大学	准教授	(美術研究科)	ミヒャエル シュナイダー
(副査)	東京藝術大学	教授	(美術研究科)	O JUN
(副査)	慶應義塾大学	教授	(文学部)	岡原 正幸
(副査)	慶應義塾大学	専任講師	(理工学部)	井本 由紀
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	

(論文内容の要旨)

私は2015年8月からスイス人パフォーマー兼演出家であるニナ・ウィリマンと、アーティストデュオ Willimann/Araiとして活動を継続している。私たちは、二人の間にある違いに向き合い、「みえ(形form)」を「重なり合わせる(unite)」ユニフォームという表現を、アジアやヨーロッパの様々な土地において、その地域の人々とともに、試みてきた。

本論文は、それらの表現活動の中で、表現活動の対象(相手)とかかわり合うときに生じる、相手のもつ世界を捉え、意味付け、行為する枠組みである「構え」と重なり合い、実践者としての新たな私のあり方が生まれる「なる」という体験について着目する。そうすることで、芸術実践を介した『「わたし」とは何か?』という問いに対する探求の軌跡を読者と共有するとともに、他者(相手)とつながる・理解する意味を炙り出す。

本論文は、表現活動を行う主体としての(「わたし」と、行なった表現活動とその渦中の「わたし」)について考察をし、記述する主体としての(私)の2つの配役によって、かたちづくられている。これは本論文の研究対象を、表現活動の主体である私自身および共同実践者であるウィリマン自身としたためである。私(たち)は、自分自身の経験をことばで表現しながら、現在進行形の私(たち)自身と徹底的に向き合い、省察し、考察するという手法をとった。

第1章では、この論述の主体であり表現活動の実践者でもある私たち、「わたし(たち)」について述べる。芸術実践を語る(私(たち))、(わたし(たち))がどのような人物なのか、読者に知ってもらうことから始める。

第2章では、研究の視座、方法、構成といった本論の全体的な枠組みを述べる。研究の視座としては、

まず本論における表現活動の定義づけを行う。また、研究の方法として「調査者が自分自身を研究対象とし、自分の主観的な経験を表現しながら、それを自己再帰的に考察する手法」[井本, 2013, p.104]であるオートエスノグラフィーと本研究方法との関係性を描きながら、主体自身の経験を書く意味を提示する。

第3章から6章では、表現活動の中身を探るため、香港・清水海岸、中之条（日本）、台湾・太魯閣国立公園、スイス・チューリッヒおよび上野（日本）で行ったWillimann/Araiの4つの活動を事例として取り上げる。各章では、それぞれの活動地における文脈の中で、活動の対象である相手とのかかわり合いを通し、表現活動を行う主体である「わたし」の中に生じた体験が記される。また、同時に活動の共同実践者や参加者に起こったことを述べていく。また、各章には『「わたし」たちの気づきの交換録』と題した「わたし（たち）」が表現活動期間中に記していった記録が挟まれる。

具体的には、第3章では、香港で2015年に行った《How to disappear (completely) ((完全に) 消えるための手立て》シリーズの中から、特に「実践者自身を他者（相手）の中においてみる」という試みを行った《Re-naturalization / Practice 1 (再自然化/実践1)》という表現活動を事例として取り上げ、表現活動の実践の中で起こる1つの体験について探る。

第4章では、《The gift exercise / Invitation 2 (ギフト交換練習/招待状 2)》シリーズから、2017年に中之条にて行った《Invitation 2.1: Nakanojo (招待2.1: 中之条)》という事例を取り上げ、「相手と自分を重なり合わせる」という試みに着目し、「なる」という体験のもう1つの側面を探る。

第5章では、《The gift exercise / Invitation 4 (ギフト交換練習/招待状 4)》シリーズから、2018年に台湾・太魯閣国立公園にて行った《Invitation 4.2: Taroko National Park (招待4.2: 太魯閣国立公園)》という事例を取り上げ、「(その構えの) 重なりに見えてくる自分自身に向き合う」という試みに着目する。

第6章では、チューリッヒおよび上野で2020年に行った《Avatar tours (アバター・ツアーズ)》シリーズの中から、《#1: Zurich Altstetten (#1: チューリッヒ・アルトシュテッテン)》《# 2: Tokyo Ueno (#2: 東京・上野)》という表現活動を事例として取り上げる。ここでは、表現活動の観客から新たに参加者(相手(他者))となったツアー参加者を通して、実践者たちが「重なり合えない自分たちと向き合う」という試みに着目し、「なる」という体験の広がり述べる。

以上の4つの章において、具体的な表現活動の事例とともに「なる」という体験について描く。

第7章では、「なる」論の前章として、3章から6章で述べてきた表現活動の中身をさらに深く掘り下げていくために、Willimann/Araiの表現活動に通底する前述のユニフォームという基本的態度としての表現とその意味付けの考察を行う。4つの活動事例で挙げたいずれの試みも、はじめから「なる」という体験を得るために行われたのではなく、表現活動の中で積み重ねられた気づきと、活動の主体である「わたし」とウィリマンの間でそれらの気づきの共有が行われたことによって導かれた営みであった。ここでは、さらにそこから、そのユニフォームの表現が、3章から6章で取り上げた活動において、どのような影響を与えていたのか、また「なる」の体験との関係性について検証する。

第8章では、「なる」論の後章として、ここまで4つの具体的な事例を示しながらみてきた「なる」という体験を、改めて表現活動、そして芸術実践の中身として見ていくことによって、芸術実践のもう1つのあり方を探る。

第9章では、以上の議論を踏まえた上で、本論文の最終章として、今回おこなった論文執筆という芸術実践を通して表現活動について考察をし、記述している主体としての私の中におこったこと、そして「わたし」と私の関係性を述べ、この論文の締めとする。

(論文審査結果の要旨)

本論の主張は、芸術家の芸術実践の意味とは、そこに作品を生み出すことではなく表現活動の中に芸術

家が自分自身を見るプロセスに他ならないというものである。著者は自身の表現活動を省察することからそれを導出している。

芸術家自身が自分の表現活動をつぶさに見つめ、その成り立ちを省察し、そこから自身の芸術実践の意味と価値を論じることには大きな意義がある。表現活動の外にいる論者の視座とは別の論考が、創作主体の内にある視座から描き出されるからである。そこに表れる言葉は、芸術を实践することの喜びを人びとに示し、表現してみようとする入り口をこの社会に開くことにつながる。美術アカデミーの芸術家たちがその力を育むことは、創作することを人びとの営みとし、そこに表現する社会をかたちづくることを可能にするはずである。

著者がその省察に見出すのは、対峙する相手（対象）の物語の中に自身が包み込まれ、相手の内側からその世界を受け止める体験である。そしてそこに見る相手世界の映し鏡としての自己の世界つまり自分自身を改めて見る体験である。包み込まれることを相手に「なる」こと、そしてそこに感受する世界を「構え」とし著者は「なる」論を展開している。それは「なる」が駆動する芸術実践の成り立ちを描くものとして、とり上げた4つの事例から組み立てられる。

それらは異なる地域「香港の清水湾、中之条（日本）、台湾の太魯閣国立公園、上野」で展開された表現活動である。それぞれの実践に内在する「自分を相手の中においてみる」「相手と自分を重なり合わせる」「重なりに見える自分自身に向き合う」「重なり合えないことに出会う」という探究として4つの章にまとめられ「なる」論の骨格を形成する。

氏の芸術実践におけるもうひとつの重要な創作が、芸術家ニナ・ウィリマン氏との共同表現である。著者がニナ・ウィリマンに「なる」こと、ふたりの人間がユニットとして「ひとりになるかたち：ユニフォーム」と呼ぶ表現がおこなわれている。本論は、このユニフォーム表現が縦糸となり、横糸としての4つの表現活動を編んでいる。その4つ目の編み目で、ひとりに「なる」ことのなかに立ち現れる重なり得ない事態が言及される。ふたりが重なるようにするなかに生じるお互いの構えの隔たりを見る体験が論述されていることは、自己に再帰する芸術実践論としての本論の魅力だと言える。

芸術家がその実践に自分自身を見ることはこれまでさまざまに語られてきたことでもある。その中で著者が、自身を見るその視座を相手や対象と自身を重ねあわせる表現活動のなかに見出したことは、芸術家自身の芸術実践論の先鞭を担うものであり、また貴重な成果でもある。

（作品審査結果の要旨）

東京藝術大学美術館のロビーには、ドローイングや案内パネル、映像で来館者とコミュニケーションをとる大規模なインスタレーションが設置されていたが、作品の意図を理解するためには、パフォーマンス部分での直接的なインタラクションを考慮しなければならない。

「ガイドされる-ツアーガイド」によるガイドツアーの体験は、さまざまなレベルで注目すべきものである。

新井麻弓のパフォーマンス作品は、美術における拡張概念の伝統の中で「ソーシャル・スカルプチャー（社会彫刻）」として理解し読み解くことが出来る。これらの作品では、個人と共同体のアイデンティティの葛藤というテーマが、個人的な体験の中で繰り返し語られてきた。その過程で、民族的、社会的、経済的、宗教的、政治的、歴史的なアイデンティティを交渉するための一定のプロセスを必要とする、変化し、断片化されたアイデンティティの複雑な状況が、暗黙のうちに作品化されてきた。

しかし、当初の予定では「willimannarai」（ウィリマンアライ）の作者に作品を託し、アーティストとしてチューリッヒに滞在しながら展開していく予定だったが、コロナパンデミックが発生したことで、それが不可能な状況となった。

この困難な状況の中で、Willimann/Araiは、彼らの作品のコンセプトを、変化した生活・労働環境に適応させることに成功しただけでなく、ポストコロナ社会の現実を説得力を持って扱うことにも成功した。

スイス出身の演出家・パフォーマーWillimannと日本出身のアーティスト・パフォーマーArai（新井麻弓）の融合したアイデンティティwillimannaraiは、彼らのアートプロジェクトを共に展開し、発展していくシナリオの中で自発的に人々と交流していく。これらのやりとりは、型にはまらない遊び心のあるものであると同時に、構造化された省察的なものでもある。

移動面の制約から、芸術作品の概念的な基礎を共同で開発するには、インターネットを介したリアルタイムのコミュニケーションが必要であった。

willimannaraiの一人である新井麻弓は実際にはチューリッヒにいなかったが、チューリッヒでの滞在はそのように知覚することができた。そこにおけるウィリマンは、共通のアイデンティティを体現した代表者であり、アバターでもあった。そして、新井は東京でこの機能とアイデンティティを果たしたのである。

チューリッヒと東京を巡るツアーは、いずれも外部の視点を反映し、自己イメージの表現ではなく、探索者の興味をかき立てる情報をその場所と本質に関するリサーチから選び取るという特別な体験となっている。

ツアーのトポス（主題）、出発点に戻るラウンド（巡回）は、旅の自由が制限されている時代を反映した産物である。また、「tour-ism(ツアー・イズム/ツーリズム)」という考え方の意味がより明確になる。観光客は帰りを約束して旅にでる。彼らは移住者ではない。観光客の存在は一時的なものであり、それゆえに社会の確立された社会的、政治的、文化的基盤に対する直接的な脅威ではない（ここではマスツーリズムの間接的な脅威についての込み入った議論は割愛させていただく）。

「ガイドされる-ツアー」は、「ガイド」と呼ばれるその場所や状況に精通した知識を持った人が、その場所や順路を案内し、ツアーの終わりに出発点に戻ってくることで、知識を獲得するということを想起させるものである。

このようなあらかじめ決められたやりとりの形式は、willimannaraiによって覆された。彼女のパフォーマンスにより、ガイドは遠隔操作によってガイドするのではなく、ガイドされるアバターになることができる。

チューリッヒでの「ガイドされる-ツアー」パフォーマンスでは、もう一つの魅力的な側面が見えてきた。アバターを使うことで、ガイドされる者は何の障害も気にすることなくガイド役として同一視されるようになる。アバターの視覚的な外見は、ガイド役としての能力と正当性を確認しているかのようであり、現地に対応した言語パターンの使用によって補強されているが、実際には外部からの視線を代弁している。そのような視点、そのような批判的な判断を、部外者からの場合は受け入れられるだろうか。新井麻弓自身がチューリッヒの街を案内し、ビジネスと政治の絡み合いを批判的に論じたり、都市開発の判断に疑問を投げかけたりすれば、反対する人々も現れるのではないだろうか。

上野公園のガイドツアーの場合、権威を認められた信頼の人としてのアバターの効果はさらに複雑になる。willimannaraiは英語を話し、チューリッヒでのガイドツアーも英語で行われた。しかし、東京では2つのバリエーションがあった。willimannarai自身が話す英語のツアーと、willimannaraiを新井が翻訳して日本語で内容を説明するツアーである。

ここでは、アイデンティティ、場所、時間が最終的に曖昧になり、私たちの現実とその認識に対する絶え間ない問いかけが、遊び心を持って表現されている。

willimannaraiは、ツアーの参加者に街中を案内するだけでなく、大陸や時間帯を越えて、自分たちのアイデンティティである旅の原点に立ち返る旅に連れて行ってくれた。しかし、本当の意味での知識の獲得と、特別な瞬間を目撃したという確信を持ってである。

その意味で、この作品は、拡張されたアートの概念を模範的に具現化しただけでなく、ポストコロナ時代のコミュニケーション構造を用いて、私たちのアイデンティティ、場所、社会的な自己イメージの構築を現代的な方法で論じるソーシャル・スカルプチャーとなっている。

この作品は、概念的な意味だけでなく、美的にも説得力があり、美術館での研究の記録と発表、パフォーマンスのプロモーションとその実行は、美的な面でも補完されたものとなった。

強いて一点挙げるとすれば、ツアー中にwilliamannarai自身の中で起こった英語による対話を日本語に翻訳する必要があった事がコンセプト理解を困難にした懸念があるが、この改善点を踏まえなければ、本作品は非の打ち所がないものであったと言える。

Although the lobby of the Tokyo University of the Arts Museum contained a large-scale installation that communicated with visitors through drawings, information panels, and video feeds, the direct interaction during the performative part of the work must be taken into account in order to understand the artistic intention.

The experience of a guided tour by a "Guided - Tourguide" is a remarkable experience on different levels.

The performative works of Arai Mayumi can be read in the tradition of the extended concept of art in the sense of a "social sculpture". In these works, themes in the area of conflict between individual and community identity were repeatedly discussed in personal experience. In the process, the complex situation of changing, fragmented identities that require a constant process of negotiation of ethnic, social, economic, religious, political, historical identity was implicitly worked through.

However, the original plan to entrust the work to the authorship of "willimannarai" and to develop it during a stay as artist in residence in Zurich was no longer possible after the outbreak of the Corona pandemic.

In this difficult situation, Willimann/Arai succeeded not only in adapting the concept of the work to the changed living and working situation, but also in dealing in a convincing way with the reality of a postcorona society.

willimannarai, the identity of the theater director and performer Willimann from Switzerland and the artist and performer Arai from Japan, which has fused into one, develop their art projects together and interact with people spontaneously within the scenarios they develop. These interactions are both playfully informal and structured and reflective.

Due to the restriction of freedom of travel, the joint elaboration of the conceptual basis of the artistic work was only possible through real-time communication via the Internet.

The residency in Zurich could be perceived in this way, although Arai Mayumi as part of willimannarai was not present in Zurich. Willimann thus became a proxy, the embodiment of the common identity, and also an avatar. Arai performed this function and identity in Tokyo.

The tour through Zurich and Tokyo, which in each case reflects the perspective of the outside world and selects from the research on the place and its essence the information that attracts the fascination of an explorer rather than the representation of a self-image, becomes a special experience.

The topos of a tour, a round that returns to the starting point, is of topicality in times of a restriction of the freedom to travel. In addition, the meaning of the idea of "tour-ism" becomes clearer. The tourist travels with the promise of return. He or she is not a migrant. The presence of the tourist is temporary and thus he or she is not a direct threat to the

established social, political and cultural fabric of a society. (I did not elaborate on indirect threats of mass tourism here).

A "Guided Tour" evokes the idea of an offer by a person with knowledge and familiarity with a place or a thing, a "guide" to be led through a place or a procedure to return at the end of this tour back to the starting point and thereby take a knowledge gain.

This format of given interaction is subverted by willimannarai. Her performance lets the guide become an avatar, who, remotely controlled, does not guide himself but is guided.

In the performance in Zurich, another fascinating aspect becomes visible. The avatar enables the guided person to identify with the guide without any hurdles. The visual appearance of the avatar, which seems to confirm the competence and justification of the leading role of the guide, reinforced by the language patterns corresponding to the local usage, in fact shows the view from the outside. Would such a perspective, such critical judgments be accepted by an outsider? Wouldn't opposition triggered if Arai Mayumi herself guided Zurich residents through their city, critically discussing the intertwining of business and politics or questioning urban development decisions?

In the case of the guided tour through Ueno Park, the effect of the avatar as a person of trust whose authority is recognized becomes even more complex. willimannarai speak English and the Guided Tour in Zurich also takes place in English. In Tokyo, however, there are two variants. A tour in English in which willimannarai speak for themselves and a tour in which Arai translates willimannarai and thus describes the contents in Japanese.

Here the identities, the places and the times finally blur and a continuous questioning of our reality and its perception finds playful expression.

willimannarai have not only guided participants of the tour through the city, but have taken them on a journey that leads across continents and time zones back to their own identity, to the starting point of the journey. However, with a veritable gain in knowledge and the certainty of having witnessed a special moment.

In this sense, the work has not only exemplarily implemented an expanded concept of art, it has become a social sculpture that uses the communicative structures of post-corona time in a highly contemporary way to discuss the construction of our identity, our location, our social self-image.

The work does this not only in a conceptual sense but also aesthetically convincing. The documentation and presentation of the research in the museum as well as the promotion of the performances and their execution gave an aesthetic whole.

Only, the necessity to translate the inner dialogue of willimannarai, conducted in English, into Japanese during the tour caused a problem in the realization of the concept. One reason why the grade of the work could not have been even better.

(総合審査結果の要旨)

新井麻弓は、2015年 スイスのチューリッヒ芸術大学が香港と中国の5つの芸術大学で企画実施された異文化・異分野交流共同プロジェクトに参加した。そこでスイスから参加したコンテンポラリーダンサーであり振付家、演出家でもあるニナ・ウィリマンと2人で組んでから、今現在まで、Willimann/Arai というユニットとしての活動が継続している。

この論文と研究作品は共に2人で活動を実施し、それを元にそこでの実践について記録し、緻密な省察を含めて記述を行い、そして論考されたものである。実践の過程において、2人は個々の体験を自分自身で記述し省察することを繰り返し行ってきた。それらの省察は近年、社会学、人類学、民族誌の分野などから始まり、その他の分野でも幅広く汎用されてきているオートエスノグラフィーと近接するものと捉えることができる、このオートエスノグラフィー的な手法を積極的に用いて新井の論考は進められている。特に新井は実践を通して客観的な立場というものは存在せず、個がもつ主観性から逃れようがないことを強く意識して、それを重視する立場にあると述べている。

新井にとって、芸術実践と呼ぶように作品を作るということよりも重要なのは実際の関わりの中で起こること、起きてしまうことを絶え間なく見返して考察を繰り返し、その自己へのフィードバックで自分自身も変化していくこと、そして何かを発見していく事なのである。

博士研究作品として実践されたAvatar tours (アバター・ツアーズ)には、近代国家の構築のために作られた場所や施設などに対する緩やかな批評性があり、歴史や社会に対しても個々の人々の心情や緩やかな日常までも包摂した視点や関わり方を発見して示そうとしている。この実践例では、Avatar tours と称して、ツアーガイドをWillimann/Araiが行うのだが、スイスと日本という遠く離れた地点からスイス人のWillimannが上野に居るAraiに遠隔で指示を出し上野に来た参加者をガイドするというものである。参加者からのその場での質問にも答えたり、ガイドから質問したりもする、その時々に参加者の違いでもガイドの内容は細やかに変化するのである。その土地を実際に知らない人が別の視点からガイドすることが起こる、もしくはより深く調べ上げた内容からその土地をガイドするのであろうか、常に可変な状態で行われる。そして、Avatar が英語から日本語へと翻訳して話をする際の変換の機微にも左右される。これらは問題点というよりも今後もこの Avatar tours が試行される中で拡がりをもたらす要素となっていくのではないかと思える。

別の例では、資本主義社会での貨幣主体の経済に対して物々交換、ものと行為の交換、気持の交換などを提示している。さらに土地や自然への関わりを意識に対して、土地(自然)そのものになることを試みる。

「なる」とは、新井が体験した上野桜木でのエピソードをひとつの契機として述べている、地域住民のご高齢の方の昔話を聞く新井自身に相手との重なり合いの現象が起きて、丸ごとの自分が話者に入っている、その人になっている、その人が感じたことそのままの感覚を体験しているという記述である。「なる」という体験における表現活動の創造性と実践者としての新たな「わたし」という主体が発生するという、この主体とは何かという問題を考察している。コミュニケーションにおいて微細な心理の揺れもうかがえる、その理由は自分自身に対して「わたしは何者なのか?」と言う問いが帰ってくるからである、そして「なる」のうつりあいが起こるといふ。これらの現象は実践の中、自己省察の中で観察されている。

この論考のなかでも自己省察の部分が詳細に記述されていて考察や検証の資料としても機能する。この自己省察を重要視していることを高く評価したい。また、社会学の立場からは、このオートエスノグラフィーの方法を用いた活動と論考が美術の分野から出てきたことを歓迎し評価する旨の意見があった。

Willimann/Arai という芸術実践に挑むというこのユニット(又はデュオ)は、「わたしとは何者か」という問いを自他共に投げかけて活動を続け、そこで新たな参加者もしくは新たな仲間を見出していく、台湾での実践では、特に先住民や少数民族の新たな参加者が加わった。中之条では、地域の人々がWillimann/Araiに成り代わってその活動を継続した。こういった展開からもそれまでの枠組みや名称の呪縛からも解かれて、より自由にその活動が活発に行われる事が大きく期待できる。審査員全員の高い評価を持って、新井麻弓の論文と研究作品を博士学位に相応しいものとして認める。